

オアシスを求めて^①

キム・ソンジョン

1. アジアとは何か

3年前、国際交流基金の企画で始まったワーキング・セミナー「アジアとは何か」は、今回、展覧会の形で実を結ぶことになった。私はこの間、「アジア」というものについてずっと考えてきた。自分が住む土地であるアジア、また「アジア人」としての自分の居場所についてである。アジアのことならよく知っている。アジアは自分の日常の中にあり、当然、アジアに直面しているのだ。そう思ってきた。ところが、ワークショップの準備で他のアジア諸国のキュレーターに会い、アーティストと話そうちに、自分の中のアジアの理解というものがいかに浅薄で一面的であったかということに気づかされた。「井の中の蛙」という表現(アジア文化に共通のよう)にもあるとおり、アジアというものを限られた枠の中で見ていたに過ぎない。今回のプロジェクトを通して、さまざまな国の経歴も異なる多くの人々と共同作業を続けるうちに、偏狭なるわが視点を改めて振り返った思いである。

私は常々、アジア作家の作品を知るにしてもその主題を考えるにしてもアクセスは限られていると考えてきた(少なくとも3年前の韓国では、中国や日本のアーティストについて知る機会はあるが、他のアジア諸国のアーティストについて学ぶのは困難だった)。したがって、国際交流基金に招かれてワークショップに参加することは、アジアの現代美術を学ぶ上でまたとない機会となった。ワークショップには、キュレーター、批評家、オルタナティブ・スペースのディレクターなど、さまざまな肩書きを持つ、いわゆる「アートの仕掛け人」が、当初アジアの8カ国から集まった。フィリピン、タイ、インド、中国、韓国、日本、インドネシア、シンガポールである。プレゼンテーションの中で、私は、荘子の「胡蝶の夢」^②というよく知られた挿話を引用し、いまのアジアの変遷の様子のメタファーとすることにした。問いかけてみたかったのだ。急激に変貌するアジア、その中に求めるアジアの姿とは、いったい夢だろうか、それとも現実だろうか。おそらく、私たちが把握できるアジアとは、変容の一過程でしかないのだろう。また、そうでなくてはならない。私の「アジア」は、決まりきった形のアジアではない。さまざまな思考や発展によって形作られるアジアであり、見るものにさまざまなイメージを喚起するアジアである。別のたとえを引用するなら、容器によって姿を変える水のようなものということができる。私の「アジア」は抽象的だ。どんな形もとらない。容器次第でどんな形にもなるわけだから。

参加のキュレーターがそれぞれの発表を終えるころには、各自アジアについて異なったイメージを持っていることが明らかになった。ワークショップの後、各キュレーターはアジアの3ヵ国を見て廻る機会に恵まれ、引き続き、アジア人キュレーターによる「アジア」の展覧会についての討論を重ねていった。アジア人以外のキュレーターによるアジア展とアジア人キュレーターによるアジア展との間に何か根本的な違いはあるだろうか。確かに違いがあるとして、それは何だろう。こうした問いを念頭に置きつつ、まずは、小規模で「ローカル」な展覧会を「アンダー・コンストラクション」と題された総合展の前に開催することにした。これら衛星展の中で、キュレーターはそれぞれ得意な企画を自分の国で立ち上げたわけである。アジアの中であってアジアの真の顔を捉えるのは容易なことではない。人は普通、外からの視点の方がものごとをよりはっきりと確実に認識できる。アジアの外からアジアを眺めれば、より客観的な観察が可能となり、アジアの変化の現状をはっきりと掴むこともできる。アジアで仕事をする私たちアジア人のキュレーターは、目前の問題や議論に囚われすぎて客観性を失いやすい。こうした問題のすべてを一筆で大胆に描ききるにはまだ多少不慣れである。

① 本論文のタイトル「オアシスを求めて」は、韓国映画「オアシス」(2002年)に発せられたものである。身体障害者の女と元囚人の男の間に生まれた愛や周囲の反応を描いたこの映画は、第58回ヴェネツィア国際映画祭において、イ・チャンドン監督が「特別功労賞」を受賞。また、「マルチェロ・マストロヤニニ主演男優／女優賞」に輝いた。



② 荘子(本名は莊周)は、中国の戦国時代(楚王朝)の思想家。ある日、蝶になった夢を見る。あまりの嬉しさに自分が莊周であることを忘れる。だが、夢から醒めればもう蝶ではない。彼は、夢の中では自分が莊周だとは知らない一羽の蝶であった。だが、夢が終われば確かに莊周である。そこで彼は自分の真の姿というものを疑い始める。「私はいま真に莊周であるのか。夢の中の蝶が莊周になったものか」「私は私なのか。私とは私になった蝶なのか」。

2. 「ファンタジア(狂想曲)」——日常、自己同一、差異

総合プロジェクト「アンダー・コンストラクション」の一環として、ソウルと北京で開催された「ファンタジア」展。そのコンセプトには、「制作中の作品」という考え方がある。ソウル展の会場は、長年捨ておかれた工場ビルであり、北京展の方は、従来の白壁のスペースであった。

最近まで、複数の会場を回る巡回展というものは、最初の開催地で決められた展示構成を遵守し、参加作家の顔触れも同じものだった。しかし、ごく最近では、開催地それぞれの会場に合わせてフレキシブルに変化する巡回展が登場している。こうした傾向に鑑み、「ファンタジア」展においても、空間の構成は変わり、参加作家の陣容も後半には増える結果となった。ソウル展の会場「スペースimA」は、10年以上廃屋となっていた工場である。展覧会の会場が空きビルの場合、使い方として二つの方法がある。そのままの形で使用するのと、改装して美術展にふさわしい空間に作り変えるのとである。ソウルのプロジェクトでは、前者の方法を取ることにした。というのも、いかにも美術展といった空間や作品のありようを強調するのは好まなかったからである。そのため、ソウル展では、美術作品に備わる物理的・空間的側面が軽減されたにしろ、北京の会場では、当然ながら、作品に「作品らしさ」というものが要求された。

「ファンタジア」には、展覧会として3つの大きな特徴があった。まず第一に、3人のキュレーターの共同企画であったということ。各キュレーターがそれぞれの国のアーティストを選ぶのではなく、現地調査の際、3人一緒に作家たちと会い、作品について語ってもらい、何らかの共通点を探ることになった。先にテーマを決めて動いたわけではなく、調査の段階で多くの作家の作品に日常性という特徴を見出し、ローカル展のテーマと定めることにした。また私たち自身、日常性をどう捉えるかということも話し合った。そうした論議をもとに、自分たちの考えをアーティストの作品と結びつけ、展覧会構想の軸にしたと考えたのである。

第二点は、レジデンス・プログラムがこのプロジェクトにおいて重要な側面であったということ。よその土地で作品を見せるということにある本質的な限界を克服するため、キュレーターとアーティストは、2、3週間単位のレジデンス・プログラムに2回にわたって参加した。こうした試みは全員のネットワーク作りに繋がり、作品や展覧会そのものを深く理解することにも繋がった。実際には、レジデンス・プログラムは、美術展というものを開催する際の実に多くの現実問題をあらためて提起することになった。とはいえ、アーティスト同士、アーティストとキュレーター、キュレーター同士という豊かな関係を形成できたことも事実である。

第三点は、初回の展覧会の構成が次の展覧会を規定するものではなかったということ。つまり、ソウル展の構成がそのまま北京に移されたわけではない。二都市を移動する間に、新たに3人の作家が加わった。中国から1名、韓国と日本から1名ずつ。私たちの構想の中核のひとつには、初期の企画段階から段々に作家を増やしていこうというアイデアがあった。展覧会の開催にある固定観念を排して、時間とともに展開する制作途上の作品に近づけたかったのである。こうした方法が、3人のキュレーターのあいだに絶えず緊密な論議を呼ぶことになったのはいうまでもない。

展覧会を立ち上げるには、外的要因ばかりか内容たるテーマが重要である。しかし、最初にテーマを決め作家を選定するという従来の方法を排したからには、日常性というもののキュレーター相互の関心と、韓国、中国、日本、タイといったアジア諸国の作家の作品にある日常性の表現とがどう結びついているのか、真剣に考えねばならなかった。日常のテーマは、何も現代美術に限って重要な主題ではなく、どの作家の作品にもあてはまる要素だと言えるかもしれない。ところが、興味深いことに、この同じ日常という語彙を用いながらも、3人のキュレーターが意味するところ、その解釈は大幅に異なるのであった。

中国人キュレーター、ピー・リーに言わせれば、日常とは、社会的、政治的意味合いを持つ言葉である。日本人キュレーター、神谷幸江の場合は、生活レベルにある文字どおりの日常の意味を超え、そこにファンタジーの概念を読み取ろうとする。私自身は、多様な素材や技法によって現実というものが作品化される、そうした表現の中にこそ日常があると思った。似通っているようで異なる、それぞれの日常感を結晶させるべく、私たちキュレーターはかなりの時間を費やして議論した。共通の基盤を形成しようとした。

今回のプロジェクトの始まりには「アジアとは何か」のトピックがあった。したがって、多くの国のアーティストと会って話を聞くことが必須であった。そうした中で考えたのは、西洋人の目に映るエキゾチック

なアジアの展示ではなく、いまこの瞬間を生きる私たちのアジアというものを提示できたらという思いであった。私たちの日常には、多くの文化や習慣が混在する。その多様性、急激な変化、現実を凌ぐまでの幻想性。そうした様相の中では、日常とは決して静止したものではなく絶えず変転するイメージとして浮かびあがる。参加アーティストの作品に見られる日常のとらえ方は一様に見えるかもしれない。しかし、実際には、個々の経験や記憶に派生する多種多様な日常なのである。

ソウルでも北京でも、会場は美術展のスペースとしてあった建物ではない。ソウルでは、『東亜日報』（日刊新聞）の元印刷所が使われた。10年以上放って置かれたため荒廃の状態にあった。この長い空白ゆえに、会場を展示に適したスペースにするのは困難を極めた。ところが、純化された美術展会場と違って、工場という日常空間は、実のところ、「ファンタジア」の主題にはうってつけであった。展覧会に不都合だった箇所をあげるなら、まず入り口が、同じビルの二階にあるオフィスと共同使用であったということ。さらに悪いことに、退去したはずの新聞社も入り口近くの一部をいまだ倉庫替わりに使っていた。収納品を撤去するわけにはいかず、普通の展覧会なら直面するはずのない問題に対処せねばならなかった。韓国の作家イ・ミギョンは、まさにこの問題を取り上げて、空間自体の再構成を作品とした。つまり、古本や雑誌で埋る倉庫の部分と入り口とを区別したのである。ももとの建築機能には妥協せず、展覧会へのアクセスを容易なものとした。北京展の会場も、未使用の広いスペースであり、マンションのショールームの階上にあった。イ・ミギョンはここでも空間のデザインをした。ソウルの工場跡というスペースに比べれば、北京の方は白壁であった分、観客が展示作品に集中できるという利点があった。

展覧会を知らしめるにも、困難な問題がついてまわった。ソウルの「スペースimA」も北京の「遠洋芸術センター」もそれぞれ市街のアートの中心地からは遠く離れ、これまで美術展などに使われたことのない建物である。観客や来場者となりそうな人の目を引くべく、シンプルなちらしを作成した。展覧会の前哨戦であったレジデンス・プログラムの期間には、多くの学校を訪れて講演会やアーティストによる発表の機会をもった。日本人アーティストの小沢剛は、パフォーマンスの一環として何度かパーティを開いた。また、学生たちに呼びかけて、作家のアシスタントとして展覧会に参加してもらった。

3. オアシスを求めて

総合展「アンダー・コンストラクション」の企画が、3年前、「アジアとは何か」のセミナーとともに始まったとき、アジアが何であるかについてかなり明確な意識があったと思う。しかし、展覧会を準備し、アジアというものに絶えず思いをめぐらすにつれて、この問いは次第に複雑になり、不明瞭なものとなっていった。ではいったい、アジアって何だろう。確かに、アジアは単なる地域の総称ではない。たくさんの文化を包含し、それぞれ独特で複雑な文化が、さらに層をなして積み重なっている。地理的な近さや文化的相似など、目に見える共通項の下に複雑に交差する網の目がある。アジアを見つけるのは、砂漠の中にオアシスを探そうとする行為かもしれない。砂漠に入る（立ち往生する）前は、オアシスを見つけることなどわけないと考えるだろう。しかし、それは容易な仕事ではない。

オアシスは砂漠にある。オアシスとは砂漠だけにあるものだ。オアシスは砂漠に見つけれられると信じて、だからこそオアシスを探し求める。ときとして、この見つけようという強固な意思が私たち自身を欺き、幻影を追わせようとする——オアシスの幻想であってオアシスではないものを。砂漠という茫洋と限りない砂の広がりの前にすれば、オアシスはひとつの楽園のようだ。それ自体、必ずしも美しいものではないかもしれない。だが、砂漠の中にある限り、それは美しい。

アジアとは、日照りや喉の乾きに苦しみながら追い求める、そうしたオアシスなのだろうか。オアシスが華麗に見えるのは、それを取り巻く環境による。多くのローカル展に支えられた「アンダー・コンストラクション」展は、アジアの作家たちのいまを見せようとする試みだ。本展が、オアシス発見の瞬間にあるというのではない。むしろ、探索の過程を表わすものだといえよう。この大がかりなプロジェクトのなかで、私たちはアジアを見つけるべくさまざまな方法論を試みてきた。いうまでもなく、複数の国で複数のローカル展を立ち上げ、それらをまとめる形でまた新たな展覧会を生み出すのは、大きな挑戦である。東京展に先立つローカル展の開催には、それぞれの経緯があった。展示内容もコンセプトも大幅に異なっていた。しかし、大きく分けて二つの傾向が浮かび上がってくる。いまのアートに焦点をあてたものと、伝統や歴史に比重をおいたものである。こうした私たちの努力の成果をひとつひとつ見比べていけば、同じようでも異なる、また違ってはいても共有できる考えに思い至るのである。

参加のキュレーターが協力合って「アンダー・コンストラクション」展を実現していったその過程は、

砂漠の中のオアシスへと通じる道のりに似ている。オアシスを見つけるためには、少なくとも何度かは、幻影に惑わされねばならない。そうした試行錯誤を経てのみ、人はオアシスにたどり着くのである。「アンダー・コンストラクション」展は、オアシスだろうか。より厳密に言うなら、私は、本展はオアシスを希求するものだと考えたい。8人のキュレーターはみなそれぞれ、視点も、よって立つところも異なる場所から集まって、このプロジェクトを完成させた。「アンダー・コンストラクション」とはしたがって、そうした差異を互いに理解するという行為がまず前提にあり、違いの中に共通点を見い出そうとする努力が目的となって実現されたプロジェクトである。住む環境も経歴も異なる専門家同士が違いを乗り越え、多様な切り口の展覧会をそれぞれに開催した。そうした努力の過程こそ、オアシスを求める道のりに似てはいないだろうか。